

政経倶楽部

今という時代を知り、
新しい国是と日本のあるべき姿を考える

～日本は世界のモデルになれる～

政経倶楽部の「日本創生」理念

平成23年10月28日

日本政経連合総研 理事長

林 英臣

今という時代を知り、新しい国是と日本のあるべき姿を考える

今、私たちはどんな時代に生きているのか。現在という時点が、文明や歴史の流れの、どこに位置するのか。これを知らなければ、信念に裏打ちされた指導にならないし、的確な改革も出来ません。そこで、私たち政経倶楽部が提言する「日本創生」の時間軸における立ち位置を、大局・中局・小局に分けて紹介します。

大局 21世紀は東西文明の交代期

かつて列強として世界を制覇した西欧諸国に、往年のような勢いは見られなくなりました。20世紀に入って指導大国の地位をイギリスから継承したアメリカも、今日では長期衰亡期の中であって、国力の低下に苦しんでいます。

「西の文明」に属する欧米諸国が衰退期にある一方で、「東の文明」に属する地域の活力が、20世紀の終わり頃より飛躍的に向上してきました。東アジアや東南アジア諸国の興隆、中国やインドの成長、西アジアのイスラム系諸国に見られる民衆の活気などに、そのことがよく現れています。

松下政経塾を創立した松下幸之助塾長（当時）は、第1期生募集時の「入塾のしおり」に次のような「塾長のことば」を述べていました（昭和54年・1979年）。

「世界の歴史を通観すると、繁栄の中心は時代と共に移り変わっている。古代、エジプト等中東の地において文明の発祥を見、ついで繁栄はギリシア・ローマをへて欧州全域に広まり、さらに近代にいたってアメリカへと移った。そのアメリカが停滞の様相を示しつつある今日、世界の繁栄は二十一世紀には日本をはじめとするアジアにめぐってくると思われる。従って、日本はいまから国の各面にわたって、きたるべき繁栄の受皿づくりに取り組まねばならない。（後略）」（下線筆者）

この松下塾長のことばに、21世紀の日本の指導者が持つべき文明観がよく示されていると思います。21世紀は「西の文明」が衰亡し、「東の文明」が興隆する文明交代期なのです。

中局 明治維新以来、「3回目の坂の上の雲」を描くとき

近現代日本史を見ると、2回の成長期が認められます。1回目は近代国家を力強く建設した明治時代、2回目は焼け跡からの再生に努力した戦後復興期です。

前者の結末は、大正時代に一時の爛熟期を迎えた後、昭和に入って内政・外交共に混乱を来たし、敗戦亡国へと到りました。後者の結果は、バブル経済期を繁栄の

ピークとした後、平成不況に突入し「失われた20年」に落ち込むこととなりました。

明治が国是とした文明開化・富国強兵・殖産興業、戦後日本人が共通の目標とした焼け跡からの復興。どちらも40年程度しか保たず、後世にツケを残す結果にはなったものの、ともかくも苦勞の向こうに仰ぎ見ることの出来る「坂の上の雲」でした。

日本の生成発展には、新たに「3回目の坂の上の雲」を描くことが必要です。このためならば日本再生に本氣になれる、という最低100年は有効な国家目標や国是が今、求められています。

小局 旧体制の破壊と新政府の誕生

「3回目の坂の上の雲」を描くには、新政府の誕生が不可欠です。旧体制の既得権益を打破し、文明交代期の激変に耐えられる日本を創生するため、それを担当する政治勢力を興さねばなりません。ただしその役割は、既成政党の枠組みのままでは担えないと考えています。

大雑把な予測ですが、節目として2020年くらいまでに新政府を誕生させなければ、日本の創生に間に合わなくなるでしょう。文明法則史学（東西文明の800年周期交代を発見）に基づく研究では、21世紀の今が文明交代期であり、その激動が一番激しい時期は、2020～2050年頃と予想しています。それより遅いと手遅れになり、我が国は世界の激動の中で自立力を維持出来なくなる恐れがあります。

実際、世界に目を転ずれば、安定に向かう要素は乏しく、混迷を深めると思われる問題が山積みしています。衰退するアメリカは、米国債にデフォルト（債務不履行）の恐れがあり、ドルが基軸通貨の地位から転落しかねない状況です。ユーロにも元にも不安があることから、世界経済は多極化時代を迎える可能性が高まっています。

政治理念や歴史観、国家観などを共有する政治勢力の誕生を

そうしてみると、2020年までの間、日本はアメリカの衰亡と、不安定ながらも膨張を加速させていく中国との間に挟まれることとなります。まだしばらくは米軍の後ろ盾が必要だが、間もなく米軍をあてにできなくなるということを想定しておかなければなりません。

中国は今、世界中で資源獲得戦争を展開させており、文明転換期に出現する“膨張帝国”となる恐れがあります。800年前のモンゴル民族、1600年前のフン族+ゲルマン民族、2400年前のアレクサンドロス大王の活動に匹敵する活動を起こしかねないのが21世紀の中国です。

何とか独立を保っていられるであろう2020年までが、日本にとっての正念場です。

今2011年ですから、残された時間は多くはありません。この数年間の内に、まず「旧体制の解体破壊」をやり、2015年あたりに新しい政治勢力の“芽”を起こして「新体制の建設準備」を進め、2020年頃には新政府を誕生させて「3回目の坂の上の雲」のもと、日本を再生・創生させねばなりません。

家の建て直しでは、最初に古屋を解体し、地均しを行ってから基礎工事を行い、それから骨格を組んで新しい家の建設が進んでいきます。社会秩序も、内部がすっかり腐っている場合は、まず旧体制の解体作業から取りかからねばならないのです。その解体作業を怠り、崩れゆく幕府の修繕をするような政治を行ったところで、歴史に対して何の役にも立たないでしょう。

いかに卓越した政策やアイデアがあっても、それを生かす人材が多数育っていなければ実現は不可能となります。国是や政治理念、歴史観、国家観などを共有する政治勢力が誕生しなければ、日本再生は絵に描いた餅で終わってしまうでしょう。そこで次に、新しい国是について述べます。

新しい国是と日本のあるべき姿

1 「共生文明の創造」

明治維新では西洋模倣の「文明開化」が国是でしたが、これからは人と自然、東洋文明と西洋文明が融合した「共生文明」を国是とする時代になります。文明交代の先駆けの国となって人類進化に貢献するのが、日本のあるべき姿の第一です。

一方で、文明転換期は何が起きてもおかしくない混乱の時代となります。今後、発展途上国の更なる経済成長に伴う資源・エネルギーの枯渇や、生活の向上による食糧不足などが、地球規模で発生するおそれがあります。これに気象異変や環境破壊が重なれば、資源・エネルギー・食糧が高騰し、輸入が滞る事態が発生することは、当然想定していなければなりません。国民の衣食住を保証できるリスク・マネジメントが政策に求められるのは当然です。

さらに、世界的な混乱が発生した際でも、国民の生命・財産を守ることのできる国防の充実と、治安の維持を急ぎ準備しておかねばなりません。

2 「高德国家の建設」

明治維新では西欧列強がお手本の「富国強兵」が国是であり、戦後は経済戦争に勝つことと、それを支える“産業戦士による富国強兵策”が続きました。社会秩序が転換し、日本に新しい国家体制が誕生しようとしている今、国家においても国民においても、徳の高い日本の建設が求められています。これを「高德国家」と呼び、私たちはこの建設を新しい国是の二つ目に掲げます。

「高德国家」においては、お陰様、お互い様、勿体ない、お役立ちなどの日本の

心を生かし、徳と幸福感の高い国を目指していくこととなります。高德国家となれば素直な愛国心が生じ、「国民の絆」が結ばれます。健全な防衛意識も醸成され、ひいては平和立国につながるでしょう。それらが日本のあるべき姿の第二です。

また、高德国家の建設には、次の「3つのひとり立ち」が必要になると考えられます。

「個人のひとり立ち」…勝手主義の自由を自立、行き過ぎた平等を公正、無責任な民主を民本、観念的な人権を尊厳と解釈し直し、依存心が強く、ひとり立ち出来ない個人主義を正します。

「地方のひとり立ち」…文化力、歴史力、言語力、教育力、技術力、環境力などを生かして地方の自立を進めます。あわせて地方分権と道州制を根幹政策に据え、明治以来の中央集権体制からの脱却を図ります。

「外交のひとり立ち」…アメリカに頼り過ぎないための「脱米」と、毅然とした対中外交によって外交の自立を整えます。それらを支えるため、モンゴル・韓国・台湾・ロシア・インド・東南アジア諸国などとの連携を重視します。

3 「公益経済の確立」

明治維新では膨張資本主義に基づく「殖産興業」が国是となり、これに「富国強兵」が重なり、その延長線上に第二次世界大戦の勃発と敗戦がありました。戦後においても、無限に膨張する物欲&拝金資本主義がバブル崩壊やマネーゲームの狂乱につながりました。これまでの資本主義は、その物欲拡大のエネルギーの強さに比べ、目的や理念の崇高さに乏しかったと言えます。地球環境の破壊や地域社会の弱体化も、そこに原因があるものと考えられます。

あるいは利益至上主義は、仕事に感じる喜びを奪い、幸福を味わうことの少ない人々を育ててしまいました。資本主義に転換が求められ、進化型資本主義（新経済システム）が始まろうとしている今、それを「公益経済」と呼び、その確立を新しい国是の三つ目に掲げます。

「公益経済」は、従来の資本主義の修正を図る進化型経済（新経済システム）であり、その基本は次の3点（天地人・三本主義）です。これが、日本のあるべき姿の第三です。

天本主義経済… 天地自然の働きを生かした循環型経済

地本主義経済… 「地域経済生態系」を基本とする地産・地流・地消経済

人本主義経済… 人が幸せになるための互惠繁栄経済

ところで、松下幸之助塾長は、経済について次のように語っていました。

「松翁ある人に次のように言われた。共産主義も行き詰まる。資本主義も行き詰まる。第三の思想が生まれる時代がやがて来るだろう。」

江口克彦『松翁論語』PHP研究所283ページ（下線筆者）

松下塾長の「第三の思想」と「公益経済」は、重なる部分が多いはずです。

それから、3・11大震災からの復興は、公益経済への転換を基本に進めるべきと思います。単なる焼け跡からの復興ではなく、日本全体を救い、世界的危機に対応可能となる再生でなければなりません。

これからの政治は、様々な危機に対応し、いのちを守るものであって欲しいと私たちは考えます。国家といういのち、国民一人ひとりのいのちを守るのです。そうして、世界のモデルを興すのが日本の役割であり、それをリードするのが私たち政経倶楽部の役割であると考え、行動してまいります。